

古浄瑠璃『しのだづま』の新趣向

— 文章の重なりと、「書」の相伝の観点から —

THE ENPO 2 SHINODAZUMA

Reshaping Ancient stories into kojoruri form

加 賀 佳 子*

The well-known tale of “Abe no Doji whose mother is a fox”, famous for the poem “koishikuba tazunekite miyo” (“If you miss me, then come to me”), has often been used as material for *yoruri* and *kabuki*, or played and sung by blind female singers (*goze*).

The precursor of these works was *Shinodazuma*. The *sekkyo* entitled *Shinodazuma* is often given as one example of five *sekkyo*, but the original text of this no longer exists, and also its real *sekkyo* content is unknown.

On the other hand, there are ancient *yoruri* plays *Shinodazuma* in Kyoto and Osaka, an anonymous work (possibly by Dewanojo) from the second year of Enpo, as well as a work by Kakutayu from the sixth year, which are regarded as having similar sentences. In Edo, there is also *Abe no Seimei Jinpen no Urakata* from the third year of Shotoku, which contains very similar sentences.

An anonymous work from the second year of Enpo entitled *Shinodazuma*

*KAGA Keiko 早稲田大学教育学部国語国文科卒業。同大学大学院文学研究科演劇専修修了。修士論文「古浄瑠璃『しのだづま』成立考－二人のあべの童子－」。現在早稲田大学大学院研究生。論文に「『小野小町都年玉』の興行年次考－『大和歌五穀色紙』との関係において－」。「初代市川団十郎年譜（一）－誕生より元禄九年－」などがある。

Tsurigitsune appending *Abe no Seimei shussho* is presently considered to be the earliest publication as a *kojoruri Shinodazuma*. This book provides the first clue for our research into *Shinodazuma*.

Hokisho a commentary on the *Hoki* almanac has generally been regarded as the work which provided the basis for this Enpo 2 *kojoruri*, though Prof. Watanabe Morikuni has proposed the theory that the original was in fact *Abe no Seimei Monogatari* from the second year of Kanbun.

However, in relation to the ancient *loruri Shinodazuma*, in addition to *Hokisho*, there are *Hokishuriden*, thought to pre-date it, and the *waka*-based *Tsukinokarumoshu*. The Enpo 2 *Joruri* seems more likely to have been influenced by these works rather than *Abe no Seimei Monogatari*, elaborating their basic material and re-shaping it into *loruri* form.

In this light, I would like to analyze how the Enpo 2 *kojoruri shinodazuma* borrows stories from these older texts, recreating itself as a new work of ancient *loruri*.

はじめに

「恋しくばたずね来てみよ」の歌で知られる『しのだづま』は、延宝¹2⁶7⁴年の『しのたづまつりぎつね付あべノ清明出生』をはじめ、数冊の古浄瑠璃正本が伝存されており^①、いずれも内容・詞章等、ほぼ同じである。

この古浄瑠璃『しのだづま』の内容と類似するものとして、東洋文庫『説経節』解題は、暦数書『^{はき}簠簠』の注釈書である、『簠簠抄』を指摘し、渡辺守邦氏は、仮名草子『安倍晴明物語』を揚げています。また、同氏は、『安倍晴明物語』と『しのだづま』との文章の重なりなどから、『しのだづま』を、『安倍晴明物語』の追従作と提唱する^②。以上の2文献の他に、『簠簠抄』と同じく『簠簠』の注釈書である、『簠簠袖裡伝』も、関連した内容を記載し、また、和歌を主体とした逸話集『月刈藻集』も、『しのだづま』と内容・文章の重なり

を見せている。

『しのだづま』は5段構成の古浄瑠璃であるが、一・二段目は、主人公「あべの清明」の父である「やすな」を中心に物語が展開し、三段目は、やすなの息子「あべの童子」の出生を巡る物語が、そして四段目後半と五段目に、「清明」の物語が語られる。文章の重なりは、この三段目以降、なかんづく、四段目に顕著に認められる。四段目の前半は、「あべの童子」が「あべの清明」となる、繋ぎの部分であるが、ここで、「あべの童子はるあきら」に「書」が相伝される。この「書」の相伝は、『簠簋抄』等と、複雑なからみあいを見せ、これには、三段目の物語が深く関係する。

本稿では、『しのだづま』の成立を解明するための重要なポイントである、文章の重なり、及び「書」の相伝について検討し、『しのだづま』が上記諸文献をどのように撰取・利用して、自らの「新趣向」とし、古浄瑠璃の正本として完成させたかを考察する。

以下、『しのだづま』は、現存最古の刊記を有する、上記、延宝2年の『しのたづまつりぎつね付あべノ清明出生』^③を取り上げ、『しのたづま』と略称する。『安倍晴明物語』は、寛文2年成立、著者は浅井了意と推定されている作品であるが、巻一・二と、巻三の第一・第二章が本稿に関わる。これを、今『晴明物語』と略称し、『仮名草子集成』一、所収のものを利用する。『簠簋抄』は、巻頭に置かれた「三国相伝簠簋内伝金烏玉兎集之由来」が関係し、この「由来」を、今『簠簋抄』とする。寛永6年の菊屋整版を用いる^④。『簠簋袖裡伝』^⑤は、龍門文庫所蔵の写本で、室町末期の成立が推定されている。本稿と関係するのは「安部懐中伝暦」の部分で、これを今『袖裡伝』とする。『月刈藻集』は、慶長15年～寛永17ないし19年の成立と推定されている写本であるが、同様に、中巻のなかの「人語云ク。安部晴明ハ～寛弘二年卒ス」の部分、を、『月刈藻集』とする。続群書類従所収本を取り上げる。『簠簋』は、同じく、巻頭の序文【清明序】を、『簠簋』とする。寛永

19年写本の、岩瀬文庫所蔵のものを用いる。

論を進めるに当り、『しのたづま』と、『簠簋』を除く上記4文献との内容の関係を示すために、「◆内容」として、表を用意した^⑥。『しのたづま』の漢数字は「段」を、『清明物語』の漢数字は、上段は「巻」、下段は「章」を示す。『簠簋抄』上段の「○」は、『簠簋抄』自身の記したもので、これにより、章のようなものを現わしていると考えられる。算用数字は、各本それぞれの内容の纏まりごとに、順番に打った通しNoである。本稿に必要な部分のみを示した。

一 文章の重なり

先ず、『しのたづま』の内容の概略を記す。

一段目：2（◆内容の通しNo、以下同じ）〈やすあき館〉では、あべ家の由来などが述べられ、3〈つね平館〉では、つね平と兄の道満の来歴などがいわれる。物語は、あべのやすあきの息子やすなの信太明神社参拝、同社で、信太の森へ狐の生肝を取りに来た、つね平から、狐を救い、このため、やすなが、つね平に捕らえられる（2・3・4）、狐、僧に化け、これを助命（5）、と進む。

二段目：やすな、谷川で女を助ける（6）。やすなの父とつね平の合戦、父、討たれる（7・8）。やすな、女の庵で父の敵を討つ（9）。

三段目：やすな、谷川の女（実は狐）と、信太の森近くに逼塞。あべの童子が生れ、七歳になっている（10）。母狐、童子に正体を見られ、「恋しくば」の歌を残して去る（11）。13〈道行〉の後、信太の森で夫婦親子は対面（14）、母狐、童子に形見を与える（15）。

四段目：十三・四歳に成長しているあべの童子はるあきはは、あべ家重宝の、天文道の巻物を勉強している（16）。そこへ、伯道が示現。巻物は「簠簋」であると告げ、別に「金烏玉兎集」を与える。また、母狐は、吉備大臣であると明かす（17）。はるあきは、烏の言葉で帝の病を知り、上京（18）。これを快癒

させ「清明」の名を下賜される（19）。道満との奇特比べが行われ、清明、勝利（20）。

五段目：道満、奇特比べ敗北の遺恨などから、やすなを暗殺（21・22）。清明、これを蘇生させる（23・24）。道満、討たれる（25）。

以上の内容のなかで、『しのたづま』と『清明物語』が文章・語句の重なりを見せるのは、主として、一段目の3、三段目の10・11・15、四段目、そして五段目の25である。

このうち、先ず、3を見てみよう。

これは、「道満」の家の、出自を述べた部分である^⑦。

『しのたづま』3〈つね平館〉

（つね平は）あしやのどうまんほつしが、おとゝ也。国は、はりま、いな
みの、ちう人

（だうまんの）せんぞ、あしやのすくねきよふとが

『清明物語』17〈道満が事〉

はりまの国、印南郡に。道満法師とて（中略）俗姓ハ、芦屋村主清太が後
胤なり

『月刈藻集』2〈知恵論〉

其頃 播磨国ニ。道満ト云者

「播磨」「印南」「芦屋」「きよふと」など、『しのたづま』と『清明物語』の語句の重なりが見られる。しかし、ここまで重なる2作が、なにゆえ、傍点を打った「すくね（宿禰）」「村主^{すぐり}」の、些少な違いを持つのか。これは、背景にある道満の物語が、『しのたづま』と『清明物語』とでは、別のものであることをうかがわせる。道満を安倍晴明の敵役にした説話がある一方で、道満を陰陽の祖とし、その後胤と称する徒も、各地におり、道満を主役とした民話など

も伝承されている^⑧。道満については、次項で述べる。

次に、あべ家の本国と現住所については、それぞれ、

『しのたづま』

せつしうのちう人、あへのぐんじ、(やすなの父) やすあき

(やすあきは) 四天わう寺と、すみよしとの、あい、一つの、しやうを
ひらき (中略) あべのゝさにと、なつけたり (以上、2〈やすあき館〉)

(やすなは) いつみ成、しのたのもりも程ちかき、とあるざいけの、すま
いして (10〈出生〉)

せつしう、あべのやすなと、申ものにて候 (19〈帝の病〉)

『清明物語』

和泉国。^{しのだ}篠田の里ちかき、安倍野といふ所に。仲麿がゆかりのもの有と聞
て (9〈簠簋内伝を譲渡〉)

かの家に、安倍の安名といふ人 (が住んでいる) (10〈出生〉)

和泉の国 (中略) 安倍の童子治明と申すものなり (15〈帝の病〉)

と記述される。

『しのたづま』では、あべ家はあべの庄が本領、摂州が本国だが、父の敵討ちにより、やすなは和泉の信太森ちかくに逼塞し、一家の現住所はそこである。

他方『清明物語』では、安倍家は、本国・現住所とも、和泉である。にもかかわらず、『清明物語』は、安倍家の住いをいうときに、不必要な「安倍野」という地名を記している。

『清明物語』は、一体、典拠とした文献の誤りを正すが、また、典拠文献を引用の際、その文献の誤りをそのままに記述する、という姿勢が見られる。この「安倍野」にも、そのような事情が感ぜられ、安倍野に住む清明の徒の物語を、『清明物語』が摂取したことを思わせる。同書で、他に安倍野という地名が出るのは、童子が住吉大社に参詣、蛇を助ける、安倍野で、女房に化したそ

の蛇が童子の前に現れて龍宮へ連れて行く、龍宮から送られて童子はもとの安倍野に出る、という場面のみである。この住吉参拝のくだりの記述は、『清明物語』の撰取様相について暗示してはいまいか。

次の例は、『しのたづま』15の、母狐の、形見渡しの場面である。

『しのたづま』15〈後の別れ〉

（母狐は）かたみをとらせ申べしと てずから、四寸四方のこかねのはこ
を取出し、是はこと申は、りうぐうせかいの、ひふ也、是をさとりて、お
こなはば、天ち日月、人間せかい、あらゆることを、手の内にしる也
又 すいしやうのごとく成、か、やく玉を取出し、此玉をみゝにあて、聞
時は、鳥けだ物のなくこゑ（中略）聞しり（と、あべの童子に与える）

『清明物語』13〈秘符・一青丸〉

竜王 手づから、四寸四方の金のほこを取出し。これ、竜王の秘符なり。
これによりて、おこなハズ。天地日月人間世界 あらゆる事に、くらから
ず（と、安倍の童子に与え、また）

七宝のはこより、一青丸を取出し。耳と目とに、入られけるが

『月刈藻集』4〈出生〉

明（晴明）十三歳ノ時ニ 信太神ニ詣。明神（晴明の母の狐）如夢現泣。
如水精玉ヲアタヘ得タリ。此玉 両耳ニ蓋フ 鳥獸声明ニ通ス云々

『簠簋抄』8〈龍宮〉

（安部童子は）四寸之石ノ匣 可有 彼ヲ給エ ト望 故ニ 龍宮（中略）則給フ
（龍宮は、また）鳥薬ヲ耳ニツケ給フ

『しのたづま』で母狐は、二つの形見を童子に与える。一つは「四寸四方の黄金の箱」である。この部分に関して、『しのたづま』は、『清明物語』と文章がほとんど重なる。ところが、もう一つの形見「玉」についての文章は、『月刈藻集』と類似する。それを母狐から与えられるのも、同じである。

『清明物語』のこの部分は、先の「安倍野」の例で述べた、童子が龍宮へ行ったときのものです、それゆえ引用したように、箱を与えるのは、竜王である。『簠簋抄』の8〈龍宮〉を踏襲したと思われるが、3文献の錯綜した記述は、『しのたづま』を、ただ『清明物語』だけに結び付かせることを、うなずかせないものがある。(なお、この形見は、「書」の相伝に関わる部分でもあり、それについては、第三項で述べる)。

この、『しのたづま』『清明物語』『月刈藻集』の関係を、『簠簋抄』『袖裡伝』も加え、次項で、『しのたづま』の四段目20〈奇特比べ〉に見る。

二 奇特比べ

『しのたづま』において、道満は、いつ清明の敵役になるか、は興味深い問題である。

一・二段目では、道満の弟つね平が、清明の父やすなの敵役として活躍する。そこでは道満は、帝に重用される人物として描写され、『しのたづま』は「日本に一人の、うらかたのめいじん」とも語っている。その道満の先祖は、前項で見たように「あしやのすくね」として、『清明物語』とは違いを見せていた。また、『しのたづま』『月刈藻集』『清明物語』が道満の生国を「播磨」とするのに対して、『袖裡伝』『簠簋抄』は「薩摩」とし^⑨、『袖裡伝』は生国を明記せずに「道満ト云博士」と記している。これらから、一方の陰陽道の名人である道満の、物語伝承がうかがえるのである。

『今昔物語集』などには、安倍清明が播磨の陰陽師と対決した話が見られる^⑩。『古事談』巻六は、藤原顕光の陰謀で道長を呪咀した道摩法師が、清明に正体を暴露される話を載せ、この「道摩」は、以降の説話で「道満」となる^⑪。これらが、道満の敵役としての源流であろう。『月刈藻集』も、一条戻橋の話のあとに、『古事談』の話を記している。

『しのたづま』での道満・清明の対決は、〈奇特比べ〉として、四段目の最後に語られる。この対決は、その道にかけては「天下に一人の物」と自負する

道満の誇りが、清明（はるあきら）が帝の病を占ったことで、傷つけられたことが契機となる。道満は帝に奇特比べを申し出、二人は、勝劣をかけて勝負をすることになる。そして、五段目、敗北した道満は、清明への遺恨などから、父やすなを暗殺、敵役の本領発揮となる。これに続けて『しのたづま』は、25〈道満被討〉で、やすなの生死を巡って、互の首を賭けた再度の道満・清明の対決を語る（道満被討）が、それは『袖裡伝』等に〈頸賭論〉として載せる話の撮取であろう。その話の源流としては、『五常内義抄』第十の物語が指摘されており¹²、新潟県の綾子舞の狂言に、この物語に非常に類似した演目「龍沙河」がある¹³。

〈奇特比べ〉（知恵論）の話自体は、長門本『平家物語』の、いわゆる「中宮御産事」での、安倍泰親と同時春とのそれが、近いものとしてある¹⁴。以下に見る、錘を付けた箱の中の柑子を二人に当てさせ、泰親の正解に対し、時晴が、柑子を鼠に変えて鼠と答えること、（大臣が）時晴の占いを失敗と思うこと、時晴が箱の蓋を開けることを催促すること、鼠が出現すること、等々は、既にこのなかに記載されている。

道満・清明の対決には以上のような広がりがあるが、先ず、『袖裡伝』6・『簠簋抄』14・『月刈藻集』2・『しのたづま』20・『清明物語』19、に見られる奇特比べのモチーフを列記し、各本での各モチーフの有無、及び、その中で文章・語句の異同、を示す。5文献は、その頭文字等で表わす。なお、モチーフの順序は、各本で異同がある。

1 勝負の奏上：『月』ナシ

2 勝負の噂がたつ：『袖』『月』アリ

3 勝負の日取りの決定：『月』『し』アリ

4 場所の決定：『袖』『抄』内裏の白洲、『し』『晴』内裏の南殿。『月』ナシ

○1 奏上と4場所の決定の順序：『袖』 = 『し』、『抄』 = 『晴』

5 参内：『月』は、上達部の私邸に参会

- 6 帝らの見物：『月』（ただし、雲客）『し』『晴』アリ、『し』 = 『晴』
- 7 大柑子の入った長持が出される：『月』 = 『し』、『抄』 = 『晴』
- 大柑子の数：『抄』 16箇、『月』『し』『晴』 15箇
- 8 占う順番を決める：『袖』『抄』『し』アリ
- 9 勝負の結果により、師弟となる約束：『抄』 = 『晴』、『月』も類似
- 約束をする順序：『抄』『月』大柑子の占いの後、『晴』大柑子の占いの前、『し』一回目の占いの前、『袖』勝負の奏上の前
- 10 占う順番を決める：『月』『晴』ナシ
- 11 道満の占：『月』 = 『し』
- 12 清明の占：『月』 = 『し』
- 13 人々の思い：『月』 = 『し』
- 14 長持の蓋を開ける催促：『月』『袖』ナシ
- 15 道満の念おし：『月』 = 『し』
- 16 清明の返答：『月』 = 『し』
- 17 鼠の出現：『月』 = 『し』、『抄』 = 『晴』。『し』 = 『晴』
- 18 帝ら、感ずる：『し』 = 『晴』
- 19 道満、清明の弟子になる：『月』『し』ナシ
- 20 道満、帰宅：『月』 = 『し』
- 21 道満、清明の家に住む：『抄』『晴』アリ
- 二回に渡る占いの勝負：『し』『晴』

モチーフ列記の最後に示したように、奇特比べでの『しのたづま』と『清明物語』の、他本との大きな相違は、この2作が、占いの勝負を二回行っていることである。それを先ず踏まえておきたいが、上記したように、モチーフの有無において、『月』『し』アリ・ナシが目につき、文章においては、『月』 = 『し』、『抄』 = 『晴』が注目される。特に『月刈藻集』と『しのたづま』との文章の重なりが顕著であるのだが、これらについて、具体的に本文を見る。

A 大柑子が出される

『袖』：内裡ヨリ 長持一合 カキ出シ 此内ニ何物有カト占申セト云々

『月』：内證ヨリ 先 長持ニ 大柑子十五入テ 鍾ヲ懸テ 大勢ニテ カキ出ル
此内占ヘシト

『し』：内より、からひつを、数十人して かき出す、扱 中には、ねこニ
疋入、おもりをかけたたり、此内成物を、うらない申せと

『抄』：禁中ヨリ 長持ニ 大柑子十六入レテ 鎮ヲ懸テ (中略) 持チ出ス

『晴』：奥より 長櫃一合に、大柑子十五を入テ、鏝を^{おもり}かけて出されたり

モチーフの7、勝負の始まる場面である。

長持が出され、この中身を占うのだが、先に見た通り、柑子の数は、『月刈藻集』『しのたづま』『晴明物語』とも、同じ「十五」とする。しかし文章としては、『袖裡伝』の「内裡ヨリ」「カキ出シ」此内ニ何物有カト占申セト」に対応する、『月刈藻集』の「内證ヨリ」大勢ニテ カキ出ル 此内占ヘシト」と、『しのたづま』の「内より」数十人して かき出す」此内成物を、うらない申せと」の、類似があり、「長持」「長櫃」の違いはあるが『晴明物語』の文章は、『篋篋抄』に類似する。

持ち出された入れ物は、『しのたづま』では他にはない「からひつ」である。これは、『しのたづま』のこの占いの場面が、先述した、二回の占いの一回目のものであることによる。ここでは、『しのたづま』のいう、唐櫃の中身が「ねこ」であることに、留意しておく。『しのたづま』は、訳あって、先ず一回目の占で、猫を出現させるのである。

B 道満の占

『月』：満 イラツテ 此内ニ 大柑子十五ト占フ

『し』：だうまん、いらつて申上る、此中には、大かうし十五候と、いき

をいか、つて申上る

『抄』：無是非占テ云 是ハ大柑子十六可有ト申也

『晴』：道満、やがて、うらない申ていはく。これ大柑子十五有べしと、
申す

モチーフ11。先ず道満が占って答える。

この道満の答えに、『月刈藻集』と『しのたづま』、『簠簋抄』と『清明物語』の文章の類似が見られる。『しのたづま』でのこの道満の占いは、二回目のものである。

『清明物語』の二回の占いは、正確にいうと勝負が二度あるということで、最初は術比べである。他の4作には見られない内容で、道満が南殿の庭の白砂を投げ上げ、それを燕に化える。これを清明が打ち落とす、というものである。これに類似するものとしては、上記した『古事談』の載せる説話が考えられる。何者かが閨白を呪咀し、これを清明が、懐ろの紙を白鷺に化して犯人を捜さしめ、「道摩」と判明するくだりである。この話が、以降の説話集に摂取されたことは先述した。『清明物語』には先行文献を利用した記述が見られるのだが、ここは説話を採取しての一ひねりといったところか。

C 清明の占

『月』：明 ハツト思。能ハ ウラナフタリト

『し』：だうまん、はつと思ひしが、さらぬ、ていにて、是はきどくに、
うらなはれたり

モチーフ12の文章の重なりである。『しのたづま』は一回目の占いの場面であるため、『月刈藻集』の清明が、『しのたづま』では道満になっている。

清明がどう占ったかを記した部分では、

『し』：せいめい（中略）やがて、かぢし、てんしかえて、申上る 此内
成は、大かうしにては、有ましく候、ねすみ十五候と、申上る

『抄』：清明 加持仕替テ 鼠ト成シテ 是者 鼠十六疋 可有ト占也

『月』：心中ニ 忽ニ 加持仕替テ。鼠十五疋有ト云々。

『晴』：清明 立よりつゝ。加持し替て 申様 これは、ねすみ十五ひきあり
と、うらない奉りたりと申す。

と、文章自体には、際立った類似は見られないが、語句としては「加持仕替テ」
「(鼠十五・十六) 可有・有・あり」という『簠抄』『月刈藻集』『清明物語』
と、『しのだづま』の「かぢし、てんしかえて」「(鼠十五) 候」が、わずかな
違いとしてある。

ただ、話の展開上では、『しのだづま』『月刈藻集』の清明の加持は、「やが
て」「忽ニ」であるとして、微小ながら類似を見せる。また、『しのだづま』の
中略部分の「本より名人なれば、かうし（柑子）とは、しつたれ共、さすか、
めいよの物なれば、爰ぞ、きとくをあらはず所と思ひ」という本文と、『月刈
藻集』の「心中ニ」の、いわんとすることは、相応するかもしれない。上記、
長門本『平家物語』では、なにゆえ鼠と答えたのか、という問いに、時晴は、
始めに泰親が柑子と言ったので、自分も同じ答えをするのは「無下」に思い、
「まこと」に鼠を出してお目にかけようとした、「封し（じ）ちかへ（違え）て」
鼠と成したのだ、と答えている¹⁵。

D 人々の思い

『月』：シカレハ 明 占損ジタリト カタヅラ吞テ コレヲ守ル

『し』：扱こそ せいめい、うらかたはしそんしたりと、つゝやき さゝや
き、たがいに、めとめをみ合、只、せいめいがかほゝ、まもつて
いたりける

『晴』：晴明、うらかた仕損じたりと、人へ色をうしなひ給ふ

モチーフ13、清明の占いに対する人々の思いである。

『しのたづま』では、最初の占いで唐櫃に入れられた猫が出され（A）、清明は猫といい当てる。道満はこの答えに「はつと」思う（C）が、猫の毛色までも当てる。二人ともが正解のため、三宝に盛られた物を当てる、二回目の勝負となる。占えとの命令に、道満は「いらつて（応って）」大柑子と言い当てる（B）。しかし清明は、鼠と言う（C）。そこで、三宝の物が大柑子と知っている内裏の人々らが、清明の占い失敗として、その顔を見守り、成り行きに注目しているのが、このモチーフである。

『月刈藻集』は一回だけの勝負であるが、占うべしとの命に道満は、Bに引いたように、「イラツテ」大柑子と当てる。対して清明は、道満の正解に内心「ハツト」思うものの、大柑子を鼠に転じ変え、中身を鼠と答える（C）。人々は、清明の占いは失敗と思う。それゆえ緊迫した事態のなかで見守っているのだが、2本に文章の類似がある。

この清明の占いに、道満が、間違いないか、と念を押すのが次の類似である。

E 道満の念おし・清明の返答

『月』：満云。弥鼠相違アラスヤ。明別義ナシト云々

『し』：いかにせいめい殿、只今申上られしに、へつにかはりは候はぬか
(中略) せいめい、少しもさはかす、御きつかい有べからず (と返答)

モチーフ15・16のこの部分も、先のCの最初の例同様、『しのたづま』と『月刈藻集』だけのものである。物語は飛ぶが、もう一つ、この2本のみにあるモチーフでの重なりを揚げておく。奇特比べに敗けた、道満の描写である(モチーフ20)。

F 道満、帰宅

『月』：満 シホ へト成テ 家ニ帰ル

『し』：だうまんは、せいめい かてしと、しほ へと御前を立

さて、物語は、モチーフ17、いよいよ勝敗を決する中身の出現となる。

中身はもちろん、清明が大柑子から転じた、鼠である。『月刈藻集』『しのたづま』は、(入れ物の) 蓋を取れば柑子は無く、鼠がいたとして、各々文章が類似する。他方、『簞篋抄』『清明物語』は、蓋を開ければ鼠がいて、柑子は無かったとする重なりが見られ、この2本は『袖裏伝』に準ずるものとなっている。その『袖裏伝』はこの部分、逃げる鼠の「ジッ」という臨場感あふれる鳴き声までも記していて、なかなか興味深い。

だが、微小な語句を見ると、「かけ出」→「四かく・四角」は、『しのたづま』と『清明物語』の重なりであり、『簞篋抄』と『月刈藻集』には、「四方」→「飛去ヌ・飛出ル」の類似がある。

G 鼠の出現

『月』：則蓋ヲ取 無柑子ハ。鼠十五疋有テ ハシリ出 四方へ飛去ヌ

『し』：ふたをとれば、かうしはなくして、ねすみ十五疋 かけ出る、四かく八方へかけまはる

『抄』：蓋ヲ開ケバ 鼠十六疋出 四方八方而 飛出ル 大柑子ハ者一モ不見

『晴』：蓋をひらくに (略) ねずみ十五疋 かけ出て。四角八方に にげうせて。大柑子ハ、ひとつもなし

『袖』：蓋アケレバ 鼠六疋出テ ギツト云テ 逃ケ失セタリ

ところで、『しのたづま』は、なにゆえ、奇特比べの占いを、二回に設定したのか。それを解くのが、次の詞章である。

H 猫と鼠

其時 さいせんの二疋のねこ、かのねずみをみるよりも、其まゝかけ出、おつつめ、ほっかけ、あるひは、くわへてふりまはし、かなたこなたへ、とびめぐれは

ここに出てきた猫は、『しのたづま』が、先のA、一回目の占いで出現させたものである。その出現は、ここHにおいて、二回目の占いFで出した鼠を追わせるための、伏線であった。引用した『しのたづま』の詞章は、カラクリなどを巧みに使って、追う猫と逃げる鼠を演出、観客を沸せたであろうことを容易に想像させるものとなっている。これが、『月刈藻集』に見られる文章を摂取して、『しのたづま』が、四段目の〈奇特比べ〉で見せ場とした新趣向である。

『しのたづま』は、確かに、引用した以上のモチーフのなかでは『月刈藻集』との文章・語句の重なり・類似を持ちながら、他方、帝らの見物（モチーフ6）と、清明の奇特に帝らが感じたくだり（モチーフ18）では、『清明物語』に、重なる語句・詞章を見せている。また、五段目の〈頸賭論〉（道満被討）でも、『しのたづま』『清明物語』は、文章の重なりを持つ。そして、そこでも『しのたづま』の詞章は、カラクリを駆使するにふさわしいものとして語られているのだが、『しのたづま』が『清明物語』だけを典拠としたのではないことは、以上の検討からも判明するのではないか。

研究集会の席上で、渡辺守邦氏より、『月刈藻集』と『しのたづま』の類似は、逆に、『月刈藻集』が『しのたづま』を踏襲したのではないか、との質問がなされた。

『月刈藻集』については、原田行造氏の研究があるが¹⁶、成立年代は確定されるまでに至っていない。本稿ではその2書の先後関係は、群書解題等の推定年代に拠ったが、今この奇特比べのくだりに関しては、その関係は、『月刈藻

集』をもとにした『しのたづま』の創作力が優るか、対するに、『しのたづま』をもとに簡潔な文章とした『月刈藻集』の要約力が優るか、の見地の問題となろう、とするしかない。

だが、『月刈藻集』の要約力が優るとして、同書が『しのたづま』の詞章から約し出して自らの文章として纏めたのなら、例えば、Aの大柑子の入れ物を『しのたづま』の「三宝」にせずに、『袖裡伝』などの「長持」になぜしたのか。また、Cの後半や、Gの、微細な語句の異同はなぜなのか。あるいは、勝負の噂（モチーフ2）については、なぜ、『袖裡伝』と『月刈藻集』だけが記すのか。そして、『月刈藻集』『簠簋抄』だけは、なぜ、清明と道満の師弟の約束を、大柑子の占いの後にさせたのか。さらに師弟の約束のくだり（モチーフ9）では、『月刈藻集』と『簠簋抄』には、

『抄』：何ナリトモ 負ケタラン方ハ 弟子ニ可成約束ス

『月』：イツレニテモ 勝タラン方ヲ タノムヘキ約諾シテ

の、類似があるが、『しのたづま』は、

『し』：いつれにても、かちたるを、ししやう、まけたるをでしにして
(中略) おこなふべしとの、せんし也

である。そして、「書」の相伝の部分になるが、清明が「書」を勉強した結果をいう箇所での、『月刈藻集』と『清明物語』の、

『月』：一トシテ 明ナラズト云事ナシ

『晴』：ひとつとして、しらずといふ事ハなし

の、類似も見られるのである。

『しのたづま』と違い、『月刈藻集』の清明説話はごく短いものであり、その文章は簡潔である。奇特比べの物語も、引用したような、ほぼ一行ずつで展開する。それゆえ、『月刈藻集』は文章としては『しのたづま』を借りながら、

そのうちの細かな語句については、他の本を取り替え引き換えして、著述することになる。その手間のわずらわしさを、『月刈藻集』はいとわなかったのか。

『月刈藻集』の『しのたづま』と関連する清明説話は、その2番目が奇特比べ〈知恵論〉で、1番目が〈書伝授〉、3番目が〈一条房橋〉、4番目が、玉を与えるくだり等を載せる〈出生〉であるが（◆内容の表、参照）、この4話の典拠は、別々である可能性が考えられる。たとえば、3の〈一条房橋〉は、『源平盛衰記』巻十「中宮御産の事」にみえる記述がもとになったものと思われる、またその話のあとに、上述したように、『古事談』から続く道摩法師の呪咀譚説話を、ごく手短かに載せている。そして2の〈知恵論〉奇特比べに関していえば、先述したように、基本モチーフはすでに、長門本『平家物語』が記載しているのである。

『月刈藻集』の1～3への話の流れ自体は、ほぼ『しのたづま』のそれに近く、就中、1〈書伝授〉の内容は、「書」の相伝として次項で述べるが、『しのたづま』のそれに類似するものがある。だが、4〈出生〉は、信太神（母狐）が玉を与えることは『しのたづま』と同じで、そこでの文章もほぼ同じながら（本稿第一項）、『しのたづま』と違い、母をたずねて行くのは成長した清明であり、それは、『篋篋抄』の載せる内容と類似する。これらを勘案すれば、『しのたづま』が『月刈藻集』を典拠として、そこから直接そのまま引き写したとも、その逆とも、考えにくいのである。ここでは、奇特比べに関しては、長門本『平家物語』の流れのなかに、『月刈藻集』『しのたづま』が摂取した本を、想定しておく。

三 「書」の相伝

古浄瑠璃『しのたづま』の主人公は、いうまでもなく、あべの清明である。『しのたづま』は一段目の冒頭で、それを「ここに中比（中略）じんづうにんと、よばれし、あべのせいめいのゆらいを、くはしくたつぬるに」と謳う（1）（以下、数字は、◆内容の表の各本の通しNo.）。

この主人公である清明の登場は、三段目である。七歳の童子であり、名をあべの童子という。『しのたづま』はそしてそこで、「此わか（若）、せいじんのごにいたつて、三ごくに、かくれなき、うらかたのめいじん、あべのせいめい、是也」と説明して、「此わか」すなわちあべの童子が、あべの清明であることを、観客に確認させる（10）。四段目では、童子は十三・四歳に成長しており、名をあべの童子はるあきらと改めている（16）。この、あべの童子はるあきらが、四段目後半で、「清明」の名を下賜されて、あべの清明となる（19）。

『簠簋抄』の安部童子（安部ノ仲丸の子孫）は、別に仲丸とも呼ばれるが、清明の名を下賜され、その清明の名は世襲される（10）。そしてその末孫として「今ノ清明」が生れる（11）。この今ノ清明の出生に纏わる話が、『しのたづま』の三段目のあべの童子のそれと類似する。第二項に述べた奇特比べの清明も、『簠簋抄』では、正確にいえば、この今ノ清明の話となっている。

『簠簋抄』の清明は入唐し（18）、城荊山の伯道から「書」を与えられる（19）。この「書」は、『しのたづま』では四段目で、あべの童子はるあきらが、自宅に示現した伯道から貰った「書」であり、『しのたづま』の伯道は、「書」の名前を「金烏玉兎集」と告げる（17）。

これとは別に、『しのたづま』では一段目、あべ家に、先祖あべのなか丸から相伝された天文道の巻物が重宝として存在し（2）、四段目冒頭ですでに、あべの童子はるあきらはこれを手にしている（16）。そして伯道は、その巻物は「簠簋内伝」であると教える（17）。

この『しのたづま』の「簠簋内伝」は、『簠簋抄』では、吉備大臣が入唐して大唐の帝から貰い（5）、上記、安部ノ仲丸の子孫の童子（安部童子・仲丸）に譲渡した「金烏玉兎集」に相応する（6）。

以上のように、清明に関して、その幼名、および「書」が、たいへん複雑にからみあっている。なにゆえかくも複雑であるのかは、『簠簋抄』が二つの物語を一つにして、それを清明の話として集約したことに拠り、また『しのたづま』も、その古い物語の痕跡を、三段目に残しているためである¹⁷⁾。

「書」の名前と相伝の経緯を整理すると、

『簠簋抄』では、

- 1：吉備、「金烏玉兎集」を仲丸の子孫の童子に譲渡するが、童子は幼少であるため、その理論は伝授しない
 - 2：清明、入唐して、伯道より「是」を伝えられる
 - 3：「是」とは、「金烏玉兎集」であり、それは石ノ匣ひつに収められている
- 以上から、『簠簋抄』では、「書」（「金烏玉兎集」）は、2巻である。

『清明物語』は、

- 1：吉備大臣の子孫、安倍家に「簠簋内伝」を譲渡する
 - 2：清明、入唐して、伯道から「簠簋内伝」の「口訣」を受ける
 - 3：清明所蔵の石の唐櫃の中から「金烏玉兎集」「簠簋内伝」が出現
- 『簠簋抄』では「金烏玉兎集」が2巻であったが、『清明物語』では、「金烏玉兎集」とは別に「簠簋内伝」が存在し、「書」は計2巻となる。『清明物語』は、清明がだれに「金烏玉兎集」を貰ったかは、記さない。

『しのたづま』は、

- 1：あべ家に、天文道の巻物が、先祖なか丸より伝わっている
 - 2：伯道、あべの童子はるあきらかに、その巻物の名を「簠簋内伝」と告げ
 - 3：別に「金烏玉兎集」を与える
- 『清明物語』よりも明快であるが、『清明物語』同様、2巻の「書」がある。

『袖裏伝』は、

- 1：清明、入唐して、伯道より「此書」を授けられる
- と、一卷である。

『月刈藻集』はどうか。

1：清明の夢に、荆山の老人（伯道に相応）が示現、「一卷」を与える
と、「書」の名前はないが、これも、1巻である。清明の入唐がなく、伯道が
示現して「書」を与える内容は、『しのたづま』に類似する。

『清明物語』『しのたづま』には「金烏玉兔集」「簠簋内伝」という名前が出、
『簠簋抄』でも、吉備が大唐の武帝から下賜されたとときの「書」は「簠簋」と
いわれるが、『袖裏伝』『月刈藻集』がいうように、もともと「書」は、1巻で
ある。

『簠簋』巻頭の序文【清明序】に、それは述べられている。この序文は、
『簠簋』の作者とされる清明自らが、記した態になされたもので、そこに、清
明が入唐して、伯道から「書」を授かった経緯が記述されている。

入唐した清明に、伯道は、自分が文殊によって「理」をさとったことを語り
聞かせた後、清明に、

伝 此軌範 即 授与 一卷書

清明 請取 之題号「文殊裏書 陰陽内伝集」

また、清明が、伯道の語ったところを、道満に言い聞かせるくんだりでは、

（伯道は）名曰「金烏玉兔集」

我（清明）今改名「簠簋袖裏伝」（「簠簋内伝」）。

と記している。

「一卷書」を「金烏玉兔集」と名づけたのは伯道であり、それを授かった清
明が、「簠簋内伝」と改名したのである¹⁸。このことは『簠簋抄』も、その
「註」（「三国相伝 陰陽輅轄 簠簋内伝 金烏玉兔集 註」）で、

簠簋ト者 人物ノ名也

天竺ニテハ 石匣 金烏玉兎集

大唐ニテハ 玉匣 金烏玉兎集

日本へ渡ル時 玉石重故ニ ツツラカハコニ入テ渡故ニ 簠簋ト云也

と記しているのである。

『簠簋抄』は、曆数の書『簠簋』の注釈書であり、「註」は、『簠簋』の内題などを注釈したものなのである。その『簠簋』の内題は「三国相伝 陰陽館轄 簠簋内伝 金烏玉兎集」天文司郎 安部博士 吉備后胤 清明朝臣 入唐伝」という長いものであるが¹⁹⁾、このうちの、「簠簋」という語句の注釈で、『簠簋抄』は、「金烏玉兎集」と呼ばれた「書」が「簠簋」という入れ物に入れて運ばれ、日本へ相伝されたのだと、解説しているのである。

『簠簋』の上記の序文【清明序】の内容を、『簠簋抄』は「三国相伝簠簋内伝 金烏玉兎集之 由来」と題して、その巻頭に物語として記載した。【清明序】では、文殊は「書」を著さ^{あらわ}なかったが、『簠簋抄』は記したものとして、文殊のその「金烏玉兎集」相伝の有りさま、すなわち、天竺（文殊）→大唐（伯道）→日本（清明）と三国に渡る請来の経緯を、「由来」と題して物語として述べたのである（本稿では、冒頭に断ったとおり、この「由来」の物語を便宜上『簠簋抄』としている）。

伯道から「書」を授かる清明の入唐譚は、「書」の請来の経緯としては、「三国相伝」の物語のうちの、大唐→日本に当るものである。だが、『簠簋抄』は「由来」としてまとめた物語に、この入唐譚の前に、【清明序】には無い、清明の先祖にあたるとする仲丸の子孫の童子に吉備が「書」を譲渡する話を記載した。このために、「書」は、計2巻となって混乱するのである。

『簠簋抄』は、童子への吉備の譲渡を、吉備が入唐したとき受けた苦難を助けた安部ノ仲丸に対する、報恩のためとする。

吉備の入唐のときの苦難と仲丸の話は『袖裏伝』も記載するが、この話は、早く『江談抄』²⁰『吉備大臣入唐絵巻』などに載せられている。そこで吉備に助力する「鬼」は、「三笠の山に出し月かも」の作者、阿部仲麻呂に比定せられている。しかしその阿部仲麻呂は、『江談抄』・絵巻の物語の中でも、正史上でも、清明とも、おそらく安倍晴明家とも、関係はない。

ところが、安倍晴明家と、『江談抄』・絵巻などの阿部仲麻呂を、つなぐものがある。岩瀬文庫等所蔵の写本『医陰系図』中の、「安倍氏」系図がそれである。この系図は、清明の祖先を倉橋麿とし、この人を「仲麿」としつつ、「或記云」と注して、『袖裏伝』『簠簋抄』などに載せる、吉備と安部ノ仲丸の話に相応するものを、記載している²¹。同系図は、嫡流としては有季までを載せており、有季は永享ごろから活動する人である。「或記」と『簠簋抄』記載の物語との先後関係は未詳だが、安倍晴明と阿部仲麻呂を繋ぐ説話の存在がうかがわれる。なぜなら、「安倍氏」系図の注「或記」の「仲麿者熒惑分身也」が、『清明物語』の「仲麿熒惑星という星の分身なり」を、また、同じく「仲丸孫葉等 猶達 天文 伝其業」は、『しのたづま』のいう、あべ家の先祖なか丸が、天文道の巻物を伝えたという詞章を、想起させるからである。

では、『簠簋抄』は、自らや「安倍氏」系図がいうように清明の祖が仲丸であり吉備の報恩自体はよいとして、なにゆえ、その報恩の行為を、仲丸の子孫の童子への「書」の譲渡として、「金烏玉兔集」を2巻にし、混乱させねばならなかったのか。

『しのたづま』にも、同様の疑問が起きる。伯道があべの童子はるあきらに「金烏玉兔集」を与えるのは、『簠簋』【清明序】に照しても納得がゆき、『簠簋』もしくは『簠簋抄』の清明入唐譚を、清明を入唐させずに、伯道の示現として翻案したためと思われる。そして、あべ家に天文道の巻物が相伝されているのは、「安倍氏」系図の「或記」などから、うなずける。ではなぜ、それ自体としてなら齟齬のない、この天文道の巻物に、わざわざ「簠簋内伝」という名前を与え、「書」を2巻にせねばならなかったのか。

『しのたづま』の伯道は、母狐は吉備である、と、あべの童子はるあきらに明かして、かつての報恩に、吉備が畜生（狐）となって童子の父に縁を結んだのだ、と言う。これを手がかりにすると、『しのたづま』が、なか丸相伝の天文道の巻物＝「簠簋内伝」とする理由が見えてくる。母狐が報恩に吉備となったと明かされるのは、『簠簋抄』の吉備の「金烏玉兎集」譲渡が、童子の祖先仲丸への報恩であったことを踏まえたものであり、この告げによって『しのたづま』のあべの童子はるあきらも、『簠簋抄』のあべの仲丸の子孫の童子と同じく吉備の「書」を、持つことになる。『簠簋抄』が2巻ともを「金烏玉兎集」とし、『しのたづま』は、1巻を「簠簋内伝」、1巻を「金烏玉兎集」としても、『簠簋抄』『しのたづま』とも、その2巻のうちの、1巻は吉備が童子に譲渡し、もう1巻は伯道が清明に与えたものであることが、判明する。同時にこのとき、『しのたづま』では「あべの童子はるあきら」という名前が、一方で「童子」として、一方で「清明」（はるあきら→せいめい）として、有効に作用していることも明らかになるのだが、しかし、これを逆にいえば、いよいよ、2巻存在の原因となる、1巻目の、吉備の譲渡した「書」の存在が、不審となるのである。

そして、吉備＝母狐とすると、『しのたづま』では、別の齟齬が起こる。なぜなら、この『しのたづま』の母狐は、三段目で、龍宮の秘符である「四寸四方のこかねのはこ」を、あべの童子に、形見として与えた、その人だからである（本稿第一項、参照）。天文道の巻物＝「簠簋内伝」であるなら、母狐の与えた、この龍宮の秘符の黄金の箱は、いったい何なのか。しかも、それは、「是をさとりて、おこなはば、天ち日月、人間せかい、あらゆることを、手の内にしる也」という、まさに「簠簋内伝」に匹敵する効能を持つものなのである。

母狐の与えたもう一つの形見である「玉」は、^{ききみみ}聴耳の玉として、そして、巻物（「簠簋内伝」）は、聴耳で得た情報を「うらないてみる」ために使われる。この二つは、本国を離れ零落していた、あべ家再興の契機、はるあきらに清明

の名前が下賜される、重要な働きをしている。だが、黄金の箱については、『しのたづま』は、三段目以降、なにも語らない。何のために、母狐は、この箱を、あべの童子に与えたのか。

『簠簋抄』でこの箱に相応するのは、安倍童子が龍宮でもらった「四寸之石ノ匣」である。『簠簋抄』の安倍童子は、龍宮で聴耳の「烏薬」をほどこされ、聴耳になって帝の病を知る。「博士」と名乗って、その病を占い、祈祷によって治癒させる。その褒美に「博士」に、清明の名が下賜される。そして『簠簋抄』では、このくだりの最後で唐突に、「此仲丸」は龍宮まで行った化来ノ人であると記し、「博士」を、「此 仲丸と呼び変えることで、安倍童子との一体化がはかられる。「此仲丸」の末孫が、狐を母とする「今ノ清明」である。だが『簠簋抄』でも、龍宮の石匣はなんの役にも立っておらず、それについては、以後、記述はない。

『簠簋抄』の、「博士」＝「仲丸」に見て取れるのは、民間陰陽師の姿である。『簠簋抄』で吉備は、仲丸の子孫の住所について、筑波山の麓の「吉生」と、真壁郡の「猫嶋」との、2情報を得るが、吉生で、童子に会って「書」を譲渡する。だが「今ノ清明」については、『簠簋抄』は、猫嶋を、生国とする。すなわち、同書には、清明の祖とする安部ノ仲丸とは、別の、「博士」と自称する仲丸が存在している。

『袖裡伝』は、安部ノ中麿をあげて「天下第一ノ博士」とし、清明に匹敵させる一方で、別に「中丸ナドノ類ハ 丸ノ字ヲ不可書 丸ノ字ハ高位ノ人ニ用ルナリ」^②と記述して、身分卑しい「中丸」と、「安部ノ中麿」とを、別人としている。

この〔中丸〕の、陰陽師としての秘伝の「書」が、吉備が、猫嶋の、ではなく、吉生の童子に与えた「書」であり、それこそが、『簠簋抄』でいう龍宮の石匣、『しのたづま』でいう黄金の箱、に、納められていたのである。伯道相伝の「書」は、「簠簋」の内に入れられて、大唐から日本へ請来された「簠簋内伝金烏玉兎集」なのであり、『簠簋抄』『しのたづま』ともに、黄金の箱・石

匣に触れようとしないのは、それが、安倍晴明流の陰陽暦数の秘書である「籬篋内伝 金烏玉兎集」とは関係のない、〔中丸〕の「書」の入れ物、もしくは「書」自体であったゆえであろう。この、『籬篋抄』『しのたづま』で混乱の原因となるにもかかわらず、なお存在していた、1巻目の吉備讓渡の「書」も、〔中丸〕の物語が摂取されたことを十分に推定させる。

茨城県稲敷郡江戸崎町古渡^{みつと}に、円密院という寺院があり、同院所蔵の文書は、建武¹2年³～永享⁵2年⁴の室町時代の、常陸国信太庄の有様を現在に伝えている^②。そこには、古渡浦^{うらわたりじゆく} 渡宿の、法師陰陽師らしき者たちの躍動が見て取れるのだが、かれらは、信太庄の一宮・二宮である、竹来・木原社（現、阿弥神社・楯縫神社）の供僧らとともに、「祈祷衆」を結成している。

吉生（現、茨城県新治郡八郷町吉生^{よしう}）に住んでいた『籬篋抄』の童子が、龍宮へ行く契機となったのは、常陸国鹿嶋大社への参拝であり、その童子が「博士」と名乗って、祈祷で帝の病を治癒したこと、また、その「博士」が「仲丸」と呼ばれたこと、などを考え合わせると、おそらく、このようなフィールドで、〔中丸〕の物語は形成されたのであろうと推定させる。そして、その物語は、『籬篋抄』でいえば、吉備の「書」を讓渡された仲丸の子孫の童子の、龍宮行きから帝の病の祈祷のくだりに残されており、『しのたづま』では、三段目、龍宮の秘符の黄金の箱を与える母狐と童子に、その痕跡を留めているのである。

上記、安倍倉橋麿を「仲麿」と注記して安倍晴明家の祖とし、永享¹⁴²⁹～寛正¹⁴⁶¹ごろの人である安倍有季までを載せている『医陰系図』『安倍氏』系図の成立事情は未詳だが、同系図は、嫡流よりもむしろ鎌倉幕府に仕えた庶流の系譜を、有季の同時代ごろまで詳細に記載している。その庶流の周辺には、〔中丸〕が清明の祖としての仲丸と成る物語の形成に、かかわる人間の存在があったのでは、と推測させる。

『籬篋抄』では、晴明系陰陽師とは異なる、吉生陰陽師〔中丸〕が、同じナカマルの音により、安部ノ仲丸に繋がれて「安部」の姓を有し、童子はその子孫として安部童子となり、さらにこの安部の童子は此仲丸と呼ばれ替えられるこ

とで、狐を母とする今ノ清明の祖となった。『しのたづま』でも、物語の最後で清明を文殊の再誕と謳いながら、四段目では、伯道は、あべの童子はるあきらはなな丸の再誕と告げ、あべの童子の祖の〔中丸〕と、はるあきらの祖「あべのなな丸」とが同体化された。そして三段目のあべの童子と母狐は、四段目、母狐が吉備とされ、あべの童子があべの童子はるあきらとされることで、〔中丸〕の「書」を持つあべの童子から、安倍晴明流の「書」を所有するはるあきらとなる。あべ家の子供（童子）の意味にすぎなかった「あべの童子」の名前は清明の幼名として固有名詞化され、「はるあきら」の名で繋がれて、あべの清明となるのである。

『簠簋抄』に見られる〔中丸〕の物語を入れた、安部童子と今ノ清明の物語は、同じ「信太」の名前のゆえに、常陸国から、和泉国に繋がれたと考えられる。その背景には、『新古今和歌集』所載の、著名な和泉国信太の森を詠みこんだ赤染衛門の歌に、枕詞「葛の葉」の「うらみ（恨み）」を詠み込んで返した和泉式部の和歌²⁴などと、『万葉集』東歌にも見られる「恋しけば来ませ」²⁵の利用も可能な、三輪山説話を題材にしたであろう「恋しくば…訪問せよ」の歌²⁶の、存在等が推測される。

延宝2年の古浄瑠璃に先行する曲が、すでに舞台を和泉国にとっていたか、「恋しくば」の歌に誘われて、和泉国の信太の森へたずねるくだりを持っていただけなのかは解らないが、あるいはその曲は、『清明物語』の童子出生のくだりが典拠にしたものと、同じものから摂取したかもしれない。すでに、『しのたづま』に見られる、母狐の夫への置文の中でも引用される、「出でて去なば」の歌を残して姿を消す、木幡山の狐の異類婚の話が、『曾我物語』²⁷『伊勢物語難義注』²⁸に見られるのである。また、『月刈藻集』の清明出生のくだりが、「恋しくば」の歌を、母狐が童子に残したのではなく、異類の女が夫の不実を恨んで姿を消すときに残した、として、夫が和泉に行き信太ノ社をたずねると、出てきた狐が、自分こそ歌を残した者であると明かす、内容になっているのも、

『簠簋抄』などに見られるその歌を載せるに際しての、和歌の説話集としての改変ゆえだけであるとは思われない。

清明の由来を語る物語でありながら、延宝2年の正本は、その内題を『しのたづまつりぎつね 付あべノ清明出生』とする²⁹。ここには、この2年の曲が、三段目の出生の物語に力をそそいだことが見て取れまいか。『しのたづまつりぎつね 付あべノ清明出生』は、先行曲をもとにして、「釣狐」の見せ場を加えて三段目を創り、四段目後半の奇特比べには新たな見せ場の工夫をこらして、成立させたものであると考えたい。2年の正本と構成・内容・詞章などをほぼ同じくする、6年の角太夫の正本の内題が、ただ『しのだづま』³⁰であるのは、2年の曲の三段目流行を裏付けているように思われる。そして、それら三段目の、母を慕う童子と、子を思う異類の母の心情の、哀れな内容のゆえに、古浄瑠璃の『しのだづま』は、説経〔しのだづま〕と、呼ばれるようになったのではなからうか。

◆内容

凡例 漢数字 = 『しのたづま』: 段 『清明物語』: 巻 / 章

算用数字 = 各本の各々に、内容の纏まりごとに打った、通しNo. (内容の記述の順序を表す)

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	大内 (天文博士) (文殊再誕)		一条辰備 (清明折り) (道満被射)		清明館	道満館	奇特比べ	大内 (帝の病)			やすな内 (童子勉学) (伯道示現)	後の別れ (秘符・玉)	しのだの森	〈道行〉	狐別れ (安名傳宅) (歌)	やすな内 (出生)	庵 (敵討)	合戦	やすあき館	谷川			しのだ明神社	つね平館	やすあき館	序

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	
			太唐の城荆山文彦堂炭上付 伯道上人 来朝 井 道満法師ころさるゝ事 (伯道来朝)	頭贈論 (一)	頭贈論 (二)	頭贈論 (三)	頭贈論 (四)	頭贈論 (五)	頭贈論 (六)	頭贈論 (七)	頭贈論 (八)	頭贈論 (九)	頭贈論 (十)	頭贈論 (十一)	頭贈論 (十二)	頭贈論 (十三)	頭贈論 (十四)	頭贈論 (十五)	頭贈論 (十六)	頭贈論 (十七)	頭贈論 (十八)	頭贈論 (十九)	頭贈論 (二十)	頭贈論 (二十一)	頭贈論 (二十二)	頭贈論 (二十三)	頭贈論 (二十四)

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1												
頭贈論 二	頭贈論 一	道満と梨花	帰国	伯道回廊B	伯道回廊A	荆山脱(イヤ朝)	荆山 (修行・授書)	玉藻前	知恵論	入唐伝	清明	風	博士	安部	安部	安部	安部	安部	安部	安部	安部	安部	安部	安部	安部

4	3	2	1
出生 (歌・玉)	一条備	知恵論	書伝授 (荆山)

注

- ① 『しのたづまつりぎつねあべノ清明出生』 東京大学附属図書館・大阪大学附属図書館。『しのたづまつりぎつねあべノ清明出生物語』 大英図書館。『しのたづま』、『絵入浄瑠璃史』（部分写真）・台湾大学研究図書館、など（角太夫10行本をのぞく）。
- ② 「清明伝承の展開—『安倍清明物語』を軸として—」「清明伝承の成立—『簠簠抄』の「由来」の章を中心に—」（『仮名草子の基底』 勉誠社）、『狐の子別れ』 文芸の系譜」（『国文学研究資料館紀要』5）。
- ③ 東京大学附属図書館霞亭文庫・大阪市立大学図書館赤木文庫所蔵。翻刻『古浄瑠璃正本集』四—90。
- ④ この本については、渡辺守邦氏がお世話してくださった。『簠簠抄』 諸本に関して、同氏に「『簠簠抄』の諸本」（『実践女子大学文学部紀要』35）がある。
- ⑤ 『簠簠袖裡伝』については、渡辺氏「『簠簠抄』以前一狐の子安倍の童子の物語」（『国文学研究資料館紀要』14）があり、上記、注2・4のご論考に合せ、学恩を蒙った。
- ⑥ 「芸能史研究」115掲載の拙稿「古浄瑠璃『しのたづま』の成立—なか丸とあべの童子—」に付した図1に、追加したものである。同拙稿は、主として、『清明物語』の考察と、清明の幼名を中心に、古浄瑠璃『しのたづま』の成立について検討したものであるが、未熟な部分があり、その部分については、本稿で修正する。
- ⑦ 以下『しのたづま』の躰字は、注3の『古浄瑠璃正本集』に従ったが、わたくしに、改行等の手を加え、読みやすくした。『清明物語』等も、同様にした。
- ⑧ 堀一郎氏『我が国民間信仰史の研究』（東京創元社）。
- ⑨ この他に、『簠簠袖裡伝』『簠簠抄』の、以下に述べる〈奇特比べ〉に先立つ、道満の上京、清明との対面などを述べるくだりにおける、本文の異同はたいへん注目される。また〈奇特比べ〉のあとの、清明入唐の契機となる、玉藻前を占う清明のくだりに出る『簠簠抄』の「安部光栄」の名前は、『袖裡伝』の、内題前半部分の注釈を参考にして、理解し得るものとなっている。その玉藻前の説話を述べるくだりは、2書は、ほぼ同文である。本文の興味深い異同は他のくだりにもあり、これらは、『袖裡伝』と『簠簠抄』の関係をものがたっていると考えられる。
- ⑩ 『今昔物語』「安部清明随忠行習道語」。『宇治拾遺物語』では「清明を試僧事」（『日本古典文学大系』）。
- ⑪ 『古事談』 卷六「犬ノ告ゲニヨリ清明路中ノ魔術ヲ見頭ハス事」。以下、『宇治拾遺物語』「十訓抄」は「道満」、『峰相記』『東斎随筆』は「道満」。
- ⑫ 美濃部重克氏『昔話の発生と伝播』（名著出版）。『五常内義抄』は、続群書類従32下。
- ⑬ 翻刻詞章は、本田安次氏『語り物・風流』2。『本田安次著作集』12（錦正社出版）に復刻。
- ⑭ 卷五「陰陽頭泰親占事」。伊藤家本・岡山大学本。
- ⑮ 伊藤家本は、時晴への問いと、それに続く、清明の答えの前半の本文はない。ここは、岡山大学本によっている。引用の語句は、2本、同じ。
- ⑯ 『中世説話文学の研究』下（桜楓社）。
- ⑰ 注6の拙稿、参照。
- ⑱ 引用部分の本稿注記の名称によっている。東北大学所蔵『簠簠内伝金烏玉免集』では「簠簠内伝集」。同じ「書」を指す（引用の「簠簠袖裡伝」は、本稿に述べている、注釈書『簠簠袖裡伝』のことでない）。
- ⑲ 『簠簠』 諸本により、異同があり、本稿で用いている岩瀬文庫本には「三国相伝陰陽帽轄」の部

分はない。

- ⑳ 「吉備入唐問事」「安倍仲麿詠歌事」。
- ㉑ 東京大学資料編纂所蔵本も同じ。本文も同文。
- ㉒ 「簞籠袖裡伝」の注釈している『簞籠』は、諸本のうち「安部懐中伝暦」という外題を持つ本であるらしいが、その外題中の「安部」を注釈した部分(49句)に記される。本稿の岩瀬文庫所蔵本は外題を「安部懐中伝暦」としており、『袖裡伝』の他の語句の注釈との関係からも、あるいは、この岩瀬本系統のものを『袖裡伝』はテキストにしているのではあるまいかと推測する。
- ㉓ 「茨城県史料=中世編」1、所収。この円密院文書については、網野善彦氏に『中世東寺と東寺領荘園』(東京大学出版会)がある。
- ㉔ 卷十八。No1820, 1821。
- ㉕ 『万葉集』卷十四・No3455。
- ㉖ 『梁塵秘抄』卷二「二句神歌」・No456、など。
- ㉗ 卷五「みはら野の御かりの事」(彰考館本による。流布本諸本で表記は異同)。「出て去なば」の歌は『伊勢物語』二十一一段。
- ㉘ 「玉津嶋の御使の事」。片桐洋一氏『伊勢物語の研究』資料編(明治書院)所収。
- ㉙ 大英図書館所蔵本は『しのだつまつりきつね并あべノ清明出生物語』。
- ㉚ 水谷不倒『絵入浄瑠璃史』掲載の正本写真・本文翻刻、台湾大学図書館所蔵本による。台湾大本は、影印『台湾大学所蔵近世芸文集』2(勉誠社)、翻刻・解題は、鳥居フミ子氏「国立台湾大学所蔵『しのだづま』とその特色」(『東京女子大学日本文学』57)。注1、参照

討議要旨

実践女子大学の渡辺守邦氏から『月刈藻集』の成立年代についてなどの質問があり、発表者は現在自分の調査した資料から言えることの可能性と限界について述べられた。